

イギリスのポストモダンの思考, あるいはより良き思考の探究

クリスティーヌ・シバロン*
(遠城 明雄** 訳)

Christine Chivallon

Les pensées postmodernes britanniques ou la quête d'une pensée meilleure
Cahiers de Géographie du Québec, vol 43, n 119, 1999, pp.293-322

本研究は、前号に掲載された「ポストモダン時代におけるイギリス地理学とその診断」という論文の続編で、イギリスのポストモダニズムを、「ポストモダン」時代の諸特徴を客観化する手続き(先行研究の対象)としてではなく、思想運動として記述するものである。著者はイギリス地理学における「別な仕方での思考すること」、つまり支配原理から生じると考えられるモダンの思考の二項対立の図式から距離を置くこと、の試みを批判的に検討する。倫理的に「より良き」思考の探究の記述は、多くのポストモダンのテキストを理解するのに必要な基準を提供するために、主にフランス哲学者たちによるポスト構造主義の潮流の影響を考慮することになる。

キーワード：イギリス地理学、ポストモダニティ、ポスト構造主義、脱構築、フーコー、科学的言説、
男性性／女性性の図式、パラダイム変化

この研究は、本雑誌の前号(118号、1999年4月)に掲載された論文の続編で、ポストモダニズムの第二の側面、つまりいわゆるポストモダンという時代の特性を確定する手続きではなくて、思想運動それ自体を探究するものである。以前の論文(Chivallon,1999)の序論で触れたように、ポストモダン「イギリス」の著作の批判的読解は、1995年に至るまでの時期を扱っている。しかし、それに続く3年間の地理学の現状を一瞥することによって、この論文の結論で、ポストモダンの運動と、それがイギリス地理学内部で勝ち得た地位とが明らかにされるだろう。

ポストモダニズムに関連する思考をひとつの潮流として語ることは、きわめて難しいだろう。理論的な着想の場となったアプローチや源泉の多様性は、唯一の全体に寄せ集める作業を厄介なものにしている。むしろ、ひとつのポストモダン思想に準拠することで、イギリスの社会諸科学を揺さぶる流動性の全体に、ひとつの共通点があるようにみえることを示すことができるだろう。その共通点とは、メタ理論の構築に連なるすべてに対する不信感と、カテゴリー化されて、社会の多様性を忘れてしまった思考に影響を受けた理論的枠組から逃れようとする欲望である。

* アキテーヌ人間科学館

** 九州大学

ポストモダン運動を理解するための鍵を提供する私の試みは、明らかに人を惑わせるような見方を生み出す運命にあるように見える。確かに、私が本研究で提案する解釈は、思想の系譜を明らかにし、いくつかの論理あるいは傾向を見出し、首尾一貫した論理の場を確定するというむしろ古典的な手続きの力を利用することに依拠している。こうした解釈は、ポストモダンの思考を特徴付ける流動性や把握不可能性のダイナミズムと不可避免的に矛盾することになる。この矛盾から生じる諸変化を意識しつつ、多くの著作を特徴づける難解な哲学的抽象から私の試みを区別する閾を越えないために、少なくとも位置を評定し、枠組を組み立て、客観化するという手続きをできる限り採用することにする。

理論の諸源泉：

「主体」への回帰と「主体」の終焉との間で

新たなパラダイムや新しい方向性の探究を動機とした膨大な文献のなかに、二つの大きなインスピレーションの源泉を区別できる。一方は、社会科学における主体の「復活」に依拠するものであり、他方は、モダンの思考の図式の脱構築を試みるもので、この立場にとって主体とは、近代的図式に由来する構築物に過ぎなくなるだろう。この二つの動きは、言葉の見かけ上の不一致にもかかわらず、重なり合っている。すでに指摘したことだが、両者は、社会学的決定論という圧縮ローラーの下で、社会生活の多様性を無視した厳密な理論モデルの適用から生まれたオーソドックスな研究実践に対して抱かれている疑念を共有しているのである。ポストモダニティの社会学者ポーマンによる定義は、この一般化された疑念をポストモダンの思考の基本的特徴としている。

ポストモダニティとは、その固有の不可能性、つまり無意識に行われていたことを意識的に取り除くことによる近代性の自己モニタリングと交渉する近代性のことである(Bauman, Z., 1991, 引用は Smart, B., 1994 による)⁹⁾。

フランスの哲学者リオタール(1979)の著作は、モ

ダン思想批判のために大いに利用されるよりどころを提供している。私はここで、リオタールの着想のなかに、知は言葉の作用規則を基盤として構成されるので、近代のメタ語りは科学の進歩というイデオロギーを正当化するという考えのあることをはっきりさせておく。したがって、ポストモダンの条件は、諸科学の危機、つまりアウシュヴィッツの廃墟の上に進歩の観念を打ち立て続けることを求めた普遍主義者の正当性に対する不信感によって特徴づけられる(Fraser and Nicholson, 1988 と Lash, 1992 によるリオタールの読解を参照)。知の正当性に対する疑念を記憶にとどめる際に、最も大きな影響を及ぼしたのは、間違いなくフーコーの諸著作である。だが、この影響は知の生産領域の批判的検討にとどまらない。それは同様に一種の「より良き思考」の探究に一般的な方向性を与える。このような理由から、私はフーコーの思想の貢献についてさらに検討することにしよう。

主体への回帰…

古典社会学の図式は「主体」の重要性を認めなかった。このことは、とりわけフランスにおいて、秩序と支配の純粋システムとしての社会という表象と切断した社会思想の再生運動のなかに「行為者への回帰」を位置付けるトゥレーヌ(1984)の著作を通じて確認される。しかし、トゥレーヌは、その固有の社会および文化の方向性を生み出す者としての社会的行為者の回復を求めたとしても、行為の社会学について理論化するために、常に客観化の手続きの枠内に位置したままである。なぜなら、彼がアングロサクソンの研究のなかに理解したような主体への回帰は、強い決定論の下であるいはそれに抗してうごめく多数性を再発見することであると同時に、研究者の存在とその「主観性」をも考慮に入れるものだからである。

こうした傾向は、ギアーツに代表される解釈人類学の潮流と、民族学者が読み、再び書く「テキスト」と類比される全体としての文化および社会実践について解釈人類学が展開した考え方とに多くを負っている(Geertz, 1986:42-43)。もろもろの文化自体が、

それを実践する人々によって読まれるテキストとして考えられる。したがって、複数の文化の「テキスト」を読解し記述する手続きは、民族学者と日常で文化を生きる人々とに関わるのである²⁾。この「複数の主体の出会い」を基盤にして、人類学者はもはや民族学的観察の様相について触れないわけにはいかない。この考え方は、異なった読解者間の干渉、さらには可能な読解の多数性も意味する「間テキスト性」という概念に拡がっていく。この観点から、間テキスト性という概念は、共通の意味作用の共有に対して疑念を喚起する脱構築主義者の潮流と結びつかないわけではない。

地理学におけるこうしたアプローチの展開は、景観の生産に「テキスト」と「間テキスト性」の概念を拡張した景観研究に見られる。景観は、社会的・政治的イデオロギーの物質的形態への転換、価値体系の「自然化」としてのみならず、「脱自然化する」手続き、すなわち物質の様式(景観への介入)や精神様式(景観の再解釈)の再-編成(再-読解)を実践する行為者の側の対象になるものとして認識される。ダンカンとダンカン(1988)のテキストは、間テキスト性という見方のなかで行為者に固有の「読解」の手続きが考慮されていないにもかかわらず³⁾、この点に関して十分な事例となっている。

間テキスト的アプローチは合理主義への疑念を生じさせる。合理主義は、研究対象である現実をもっと適切に観察するために、行為者の主観性を客観化するのに役立つ道具としてもはや認められなくなるのである⁴⁾。反対に、間テキスト的アプローチは、社会活動の読解の多様性をただひとつの解釈に還元できないために、こうした客観化の探究の不可能性に帰着する。例えば、過去を再構築する試みが歴史家とその想像力の影響にのみ結び付けられているように見える時、歴史の手続きは可能だろうか。「現実」だと考えられる歴史は、もはや単なる純粋な虚構であって、特定の感受性のフィルターを通じて行われるひとつの読解の結果ではないのか。例えば、博物館は、歴史についてのある物語、特に多くのなかから想像された物語と、それが伝える—女性の歴史の多様性に触れないまま男性の領域に支配される—表象によって操作される強力な企図の上演に参加すべきでないのではないかと⁵⁾。したがって「本当の」

歴史とは、歴史に関するこうした多面的な解釈の無限の収集あるいは堆積に着手することだろう。地理学者のピシヨップが我々に語るのはまさにこれである。

したがって、歴史化することはイメージによる労働の一形式であり、一種のファンタジーの生産であり、空間化の方法である。「今の瞬間でも過去でもなく、両者の途上にある」(Hillmann,1983:44)。ポストモダニズムは具体的現実としての歴史の終焉をあまり強調しない(Baudrillard,1986)。それは実際には隠喩的現実としての歴史(過去、記憶)の始まりを示している。複数の歴史の可能な多数性を確認することによって、大文字の歴史は討議されるようになる。権力を担っていた古い言葉のすべて—進歩、義務、遺産、神—と同様に、「大文字の歴史」は今やイメージと想像的なものによって真理となる(Bishop,1992:17)。

「主体」の探究に調査者を再導入することは、「ロゴス」がタブーとしてきたこと、すなわち観察者の想像的なものや非合理的なものの復活を経由する。ここで特に地理学において、複数の「テキスト」のなかに想像的なものの存在を証言するために、最も頻繁に立ち戻られるのが、(空間的)メタファーである。それはさらに研究者ではない主体に好都合なテーマにも有効な原則である。メタファーに対するこうした関心は、「メタファーではない」科学的真理に対する情動や非合理的なものの復活としてではなく、メタファーと想像的なものが、真理、科学そして地理学にけっして欠けていたわけではなかったという事実の再認識として理解されねばならない(Doel and Matless, 1992, 経済地理学でのメタファーの利用に関しては Barnes and Curry, 1992 も参照)。同時に、科学が定義上、想像的なものや美学と混ざり合っていることから、これまで固く閉ざされていたと見なされてきた諸分野間を関連づけることが可能となり、その関連が明らかにされることになる。

伝統的な真理—客観性、自然のもの、道徳性、歴史—は、ただイメージや想像的なもの、すなわちフィクションの領域に過ぎなくなるため消え去るように思われる。したがって、ダニエルズ(1989)が注意を促したように、「現実的なもの」と「想像的なもの」のカテゴリー区分を維持することはもはや不可能である」と主張するとしても驚くことではない(Bishop,1992:7)

別の側面で、他者がその固有の文化について持つ読解を本当に翻訳できるのかという問題が提起される(人類学の基盤にある認識論上の問題が新たな言葉で提起される: 他者の概念を我々固有の概念によって理解できるのか?)。ポストモダン版では、この問いはテキストの翻訳をめぐるデリダによって展開された考え方に刺激を受けている。それによれば、あるテキストのオリジナルの誕生は無数の翻訳ののちにはじめて可能になるというのである(Bennington et Derrida, 1991:158)。

他者の世界へ入ることの可能性をめぐるこの懐疑は、現在までアカデミズムの風景のなかに不在であった人々の語りをつかむことに引き継がれている。他者の声、すなわちとりわけ女性やまた有色の人々の集団を含む周辺化されてきた集団の声である。同じく、その声はいまだ女性の声に匹敵するものになっていないけれども、アングロサクソンのアカデミー世界の新たな関与者として同性愛者を付け加えることができるだろう。しかし、ある人々は「フェミニスト、レズビアン、ゲイの理論」(Sparke, 1994)を語っている。アカデミー世界の外には、ピショップ(1992:5-6)の列挙する女性、非白人、同性愛者、精神失調者、子供といったような周辺化された集団が存在する。要するに白人男性(同性愛や精神失調でない限り)以外の全員である。なぜなら、明らかにアングロサクソンのアカデミー世界の大部分にとって白人男性の「声」は、フェミニストの知的運動によって圧力を受けながらも、支配と権力に結びついたままだからである。敷衍すれば、この男性支配の基盤の上に生み出された知は、男性が社会生活に与える男性的言説を通じて、女性と他者の声を支配する図式を再生産することになるので、まったくうさんくさいものなのである。そこにアングロサクソンのアカデミー活動の最も重要な点のひとつがあり、それを理解する鍵がなければ、マクドゥエル、マッシー、ボンディらの名前と結びつく複数のフェミニスト地理学を無視できなくなっている地理学という学問も確かに含まれている、現下の論争やそこに賭けられるものを理解するのは、困難であると思われる。

フランスの状況と比較すると、理論化(確かにフェミニズムはそれの持つ理論命題の全体を再認識させるのにより多くの困難に直面しているけれども、そ

れはマルクス主義理論に課せられたのとまったく同様の過程である)のさまざまな試みよりも、自ら進んで戦闘主義への参与を試みるような言説の侵入に驚かされるだろう。この研究分野で仕事をする例外的なフランスの人類学者の一人であるマチュー(1991)を信用するならば、その運動は社会世界における女性の地位の批判的分析を展開する女性の意思を根拠にするので、フェミニスト研究という表現に含まれるイデオロギー的内容は法外でない(軽蔑的でもない)ことは確かである。結局、アングロサクソンのフェミニズムは、1960年代の女性運動の遺産があり、それがイギリス側の助言者となっているフランスのフェミニズムとはかなり異なっている⁶⁾。60年代に続く世代は、女性のアイデンティティ構築の基礎にある性差と抑圧の社会的構築の過程に関心を限定してきた(どのような理由のためか?)。対照的にイギリス側では、女性によるアカデミー世界への関与の増大は驚くべきことである。とりわけ女性会議の開催や専門雑誌の出版にいたるまで、女性たちは自らを再び集団化し、時には理論上の重大な対立にもかかわらず、女性による女性の知の再構築という最低限の共通の企図に従事している。すなわち科学思想の男性中心主義を暴き出し、男性的に加工された社会的現実によって女性が失った社会的可視性を取り戻すことである(Mathieu, 1991)。フェミニスト研究の歴史(Fraser and Nicholson, 1988; Bondi and Domosh, 1992; McDowell, 1988; Mathieu, 1991の概観を参照)に触れなくても、ポストモダンの影響は女性を抑圧する過程に向けられた女性たちのさまざまな企てに、いまなお強い力を与えていると考えられる。図式的に言うと、女性を目に見える存在にするために、男性に偏重した見方や男性中心主義を修正するという構想(だからといって、男性による知の格子に疑問を呈したわけではなかった)から、「男根中心主義(ファロセントリズム)」⁷⁾を告発し、この知の妥当性を拒絶することに向かう構想へと移っている。一方で、ポストモダンの流動性は、さまざまな還元モデル(例えば、フレーザーとニコルソン(1988)のマルクス主義フェミニズムのようなこのモデルを利用したフェミニストの言説もそこに含まれる)の採用によって抑圧されていた女性たちの経験の多様性を再発見するようになる。他方で、それは近代知

を女性性と男性性の二元論によって組織された図式を基礎にして構成されたものだと理解することになる(Bondi and Domosh, 1992; 現在のフェミニストの論争については Barrett and Phillips, 1992 も参照)。アングロサクソンのアカデミー世界における女性の活動は、それ以来「象徴革命」⁸⁾の試みに類似している。ここはそれを論じる場ではないが、少なくとも合理的思考の妥当性と、社会構成の場を自由にできるその能力とに疑問を呈する人々にとって、重要な問いが提起されている。アングロサクソンのフェミニズムの最近の動きに直面して、いくつかの「近代的な」立場は、私がブルデューとワックワン(1992:38-39)から借用した命題の論証を基礎に置くことによるのみ強固なものになる。つまり「理性は歴史の産物であるが、それはいくつかの限界と条件の下で、歴史から逃れることのできる点で、きわめて逆説的な歴史の産物である…」という命題であり、この視座において、ブルデューはこれを「反省的社会学」と呼んでいる。それは科学の場の「行為者たち」に「思想と行為の自らのカテゴリーの反省的な制御」を確実にするために、そこに社会構造の内在化あるいは主観化を再認識させ、知の生産の社会的・歴史的諸条件を確定させる方法である。

「他者たち」の声に関して、ここではスピヴァック(1994)の見事な叙述が、「ポストコロニアル」の潮流の軌跡のなかに及ぼした影響について触れておかなければならない。それは、科学者共同体に対して、「サバルタンの声」への支配、かつての植民地帝国の声(とりわけインドの女性たちの声)への支配と、不可能な企てと思われていること、すなわち「他者」の語りの言表された言説が解釈という変形フィルターを通すことなく、また他者について／のために語るという意味が権力関係に従属することのないように、「他者」の語りを翻訳するという願望とを呼びかける。同様によく知られているベル・フックス(大文字ではない)の叙述は、ポストモダニズム的な試みにも常に含まれるこの知の支配を反復している。

「他者」は、権力を掌握し、支配する人々によって常に対象(客体)として捕まえられ、領有され、解釈され、引き取られている(hooks, 1990:125)。

以上の議論の内容には、フランス民族学の関心と

奇妙なずれがないだろうか？ フランス民族学は、「遠方」(異なったもの)の民族学(これがフランスにおけるこの学問の中心分野であった)に対して、「近接」(同じもの)の民族学の有効性を証明しなければならないのである(この点に関しては Auge, 1994, 第3章を参照)。

有効性の問いと同様に、他者の研究の正当性をめぐる議論は、すべての民族学者あるいは地理学者が自ら提起すべき義務を負う道徳的かつ政治的な問題を惹起する。このような一連の研究企図によって、倫理的・認識論的な面でこの企てを正当化する主張を見いだすことができるとしても、それは揺るぎない確実性の基礎の上にはない。我々の学問にとって根本的なこの議論は、確かにアングロサクソンの空間に存在する。それは、多くの研究者から、多元主義と多文化主義の価値に強く結びついた政治的関与を明らかにするので、現在の問題提起のなかで最も豊かな側面のひとつを構成している。しかし、この議論は差異の称賛だけにとどまるとしたら、理論的省察を十分に進めることはできないだろう。そして他者の可能な認識の様相という問い(他者と類似するものとの間の境界に関する探究を必然的に経る⁹⁾)が探究されるためには、「知」の構成についての深い疑念という現在の状況が影響を及ぼしている、他の多くの学問の企図と交差する人類学の企図それ自体にまだ同意しなければならないだろう。

そして他者の経験の再生というこの意志は、新たなカテゴリーをしかるべき位置に据える方向へ密かに進もうしているが、このカテゴリーは微細さを欠くことによって、それに先立つカテゴリーに満足してしまっている。いくつかのテキスト(Bishop, 1992のテキストは最良の事例である)に、社会世界のなかに時にきわめて単純な方法で、支配／被支配という軸によって二つの集団を区別するある種の傾向が現れていることがわかる。つまり一方で、白人男性とそれ以外の人間、女性や非白人男性、同性愛者などがいる(この点について Harvey, 1993:57-58 からの反論の試みに類似点がある)。同様に、「他者の声」の経験によって社会活動の複雑性を明らかにしようとするこのアプローチでは、一方が豊かで想像的・創造的となり、他方が抑圧的かつ支配的となるひとつの軸に社会活動を還元してしまうために、活動か

らその矛盾, 秩序, 無秩序を排除してしまうのである。こうした論理は, 他者性と差異をただヘゲモニー過程の結果とする考え方を基礎にして組み立てられる(例えば, Soja and Hooper, 1993:184-185 を参照)。このアプローチは, 最も基本的な社会関係から生じる同一性/他者性および差異化過程の構築の働きを全く忘却している。同時に, それは「周辺化された集団」に権力についての何らかの(抑圧的で悲観的で無力化された)経験を結びつけがちとなる。こうした還元的言説は, 華々しくきわめて興味深い言葉の装いの背後に隠されているが(Soja and Hooper, 1993), 権力がすでに関係の中心そのものにあり, すべての関係と不可分であるのに, それを排他的な領域に位置づけることによって, 現実には理想化された差異を描き出し, それを称賛するにとどまるように私には思われる。「権力は至る所にある。すべてを統轄するからではなく, 至る所から生じるからである。」と主張したのはフーコー自身ではないだろうか。フーコーは, 「最初に存在するものとしての中心点に, つまり派生して下へと降る諸形態がそこから拡がるはずの主権の唯一の中枢に」(Foucault, 1976:121-122)権力を探するのは無駄なことだと注意を促していなかっただろうか。

…あるいは主体の終焉

脱構築主義のポストモダン思想は, 主にフランスのポスト構造主義哲学者ジャック・デリダの著作, さらにはジル・ドゥルーズのそれから影響を受けている。ここで私は人々が何を語っているのかを知るために, これらの思想の基本的な力線を取り上げる。

デリダの企ては, ソシユール言語学の諸原理から出発して, シニフィアン/シニフィエの対の不安定さを示すために, それを脱構築することにある。それは「シニフィアンとシニフィエの間に差異はなにもない。[...]記号の構造において, シニフィアンは, ただ物質的(聴覚的あるいは書記的)でないだけでなく, 存在しない」(Bennington et Derrida, 1991:38)ことを確認する論証である。「シニフィアン/シニフィエ」の対の脱構築は, それに連なる反応を生み出し, 感覚的なものと知的なもののような別の二項

対立, そして定義上は西洋思想の骨格全体へと至ることになる。「したがって, 記号の脱構築は, 形而上学の概念の骨格を支えるその他の土台全体と, 構築および骨格の価値にも影響を及ぼす」(Bennington et Derrida, 1991:39)。

それゆえに言語記号に関する研究は, 西洋形而上学と, 一方との関係で他方を劣位に置く言葉の一連の二項対立に立脚した概念的な構築物に対する広大な再審を意味している。

脱構築という転覆の作業は, 基本概念の慣習的な諸序列を破壊し, 基礎となる諸関連と, 概念的な秩序の諸関係(例えば, パロールとエクリチュール, 感覚的なものと知的なもの, 自然と文化, 内的なものと外的なもの, 精神と物質, 男性と女性)を逆転することにある。ロジックとレトリックはこの概念的な対のひとつを形成している。デリダは, 特にアリストテレス以後, 正典化されたロジックのレトリックに対する優越の逆転をもくろんでいる(Habermas, 1985:221)。

したがって, 脱構築の作業の後に何が生じるのか。この哲学者はひとたびこの二項対立を克服すると, 「差延(différance)」を再発見し, 西洋形而上学によって邪魔されない思考の一種の本来的な流動性, 感覚によっても知性によっても把握できない運動の根底にまで遡る(Kunzmann et al., 1993:237)。脱構築されたロゴスの制約を克服した哲学は, 美学, 修辞学, 論理学の間の境界線の手前であることを試みるのである。

いくつかの文章に要約されたデリダの思想は, ポストモダンと形容される時代と完全に相互浸透していて, ひとつのメッセージを担っているように思われる。つまり流動性, 境界の溶解, 運動…であり, それは時代を創造する思想なのか, また逆に時代が創り出した思想なのかは, その時々当然自問されるほどである。いずれにせよ, イギリスの人文諸科学のテキストに影響を及ぼし, 頻繁に用いられた二元性のメカニズムに影響をもったのは, デリダの著作の潜在力である。この視点から, この哲学者の思想は, 複数の二元的構築物(私の見解では「象徴効果」や「象徴暴力」といった概念が考えられた時にそれは全く新しいことではない)の利用から生じる支配の力を追放することと同時に, カテゴリー化の思想を, 現実の流動性を隠してしまう変形フィルタ

一として考えることにも役だった。なぜなら、脱構築は、もはやひとつの「真理」はないこと、始めも終わりも、内も外も、男性も女性も…、そして主体も客体もないことを発見することで、二元性の幻想をはっきりと取り除くからであり、同一性と他者性はもはや存在せず、それぞれが溶解しあうことになる。

フランスのポスト構造主義者に属するジル・ドゥルーズの著作は、こうした考え方とは離れながらも、人文諸科学の伝統的なフィールド上で、一層徹底したやり方でそれを押し進めることで、この考え方を引き継いでいる。なぜなら、ドゥルーズ(そしてガタリ)の企ては、結局我々は慣れ親しんでいるが、「別の世界」では一変する(理論的あるいは社会経験のなかで汲み取られた)目印から、現実的なものを変形する人間学的概念を破壊することにあるからだ。たとえこの世界が奇妙であるとしても、彼らはそこに、現実的なものを一元論的「多数性」に変え、彼らが「魔術的方式」と呼ぶものを充当するのである(この「別の世界」を理解するためには、Deleuze et Guattari,1980:284 の「強度になること、動物になること、知覚しえぬものになること」の章を読むこと)。以上のまとめはあまりに簡単すぎる。そこではいまだに二元的論理を取り除き、それをドゥルーズの名前に結びつけられたメタファーである「リゾーム型の方法」に置き換えることが問題となっている。この「リゾーム」の思想は、切断と分離のない結合の原理に立脚している。それは多数のものを分割することなく結びつける。それはものを固定せず、ものは自ら動き、新陳代謝するのである。それはものを序列化せず、非中心化されたシステムに据える。このシステムは、「序列的でもなく、意味形成的でもなく、「將軍」も組織化する記憶や中心的自動装置もなく、ただ諸状態の交通によってのみ定義される」(Deleuze et Guattari,1980:32)。この方法が適用されると、何も定義されたり固定されていない現実的なもの、単に一瞬、生成、層、線、部分、強度、モル、欲望のほとぼりだけが見いだされ、すべては我々にいまだ語りかける出来事、現象、指示対象から区切られる。便宜的には、ドゥルーズの世界は次のように考えられるだろう。

主体あるいは個人の個性のない匿名の場として考え

られる現実。主体の同一性は碎かれねばならない。個人である私へのいかなる指示も超えて、私というアイデンティティのない、主体のない限りなき世界が現れる。存在は非人称になり(…)、非人称の欲望の場が生命をつかむのである(Kunzmann *et al.*,1993:237)。

したがって、デリダとドゥルーズの考え方を通じて、二元的構築物の結果である「主体」は、その姿を消すことになる。

しかし、こうした考え方がひとたび地理学という場に応用されると、どうなるだろうか。オルソン(1987,1993)のテキストは、脱構築に最も悼されたものとしてみなされる(Johnston *et al.*,1994を参照)。私は同じくライヒェルト(1987,1992)のテキストを引用することになろう¹⁰。私は付録1に二人のテキストの最初の頁をあげておいた。その読者はひとつの思想を創り出すことができるだろう。だが、こうしたタイプの企てにおいて、レトリックと美学の働きが最高潮に達しているのを明らかにするのは余計なことではない。この点について、脱構築の企ては、まさに我々の実践するアカデミー世界の境界の外側—そこでは美的なもの、想像的なもの、レトリックなもの、そして…理論(なぜなら理論的要求は常に提示されるからである)との間に戯れが可能となる—に位置するので、批判的議論の可能性という問いが提起されることになる。ポストモダンの読解(必ずしもオルソンとライヒェルトの読解だけではない)は、批判的判断によって攻撃されえない空間を創造するような印象を与える。なぜなら、それは脱構築的だとされている思想のメカニズムの基礎それ自体になっているからである。

別の著作において、脱構築の働きはただ「代理によって」行われている。すなわちその著者たちは、ポスト構造主義哲学の紹介あるいはコメントを行っているにすぎない。ポストモダン時代に関する著作や論文は、原則としてポスト構造主義的思潮の長い展開を含んでいる。「ポストモダン時代」の分析に関して引用される論者たちは、おそらくフーコーの思想に自らを限定するソジャ以外は、例外なくそうである(Chivallon,1999を参照)。したがって、地理学者あるいは社会学者は平気で抽象化の実行に没頭しており、そうすることでフランスの場合よりもはるかに躊躇なく日常的な領域に哲学的言説を導入する。

このやり方は肯定されるべきだとしても(哲学的知の脱神聖化あるいはフランスのアカデミーの風景に強く残る知の序列に対する侵犯),それには人をいらつかせる何がある。なぜなら,その戯れの目的は理解されないで,経験的な理解はほとんどの場合にこの抽象化の流れに続かないからである。ポストモダンを読解した後のニコラ・エルパンのいらだちはこれを示している。「これらの論者は倦むことなく近代性とポスト近代性を再定義し,気取りながらポスト近代性とポストモダニズムを区別する…。初期の仕事はフランクフルト学派とフランス哲学の前衛の偉大なテキストを注釈する。だが80年代半以降は,注釈の注釈が相互に積み重ねられている」(Herpin,1993:9)。

したがって,脱構築の企ては表面的に過ぎず,言語の戯れに依拠している。ソジャ(1989)の著作でさえも,「節度を保ち」,常に古典的な分析の格子に結びつけられるが,それを免れていない。彼は我々に,その文体が水平的・同時的秩序を求めているのに対して,時間的・継起的秩序から生じていることを後悔していると言っていないだろうか,あるいは5章と6章の序文と序論の結論を読むように言っていないだろうか!ポストモダンの著作は,ドゥルーズとガタリ(1980:31)自身が語っているように,二元的思考をより上手に消滅させるために,便利に過ぎなかっただけの二元論,二項対立の働き,あるいはさらになんらかの分類形式を利用することへの注意を,我々に的確に示してくれるだろう。しかし,その言葉は,「モダン」理論,特に構造主義理論にかなり近い検討によって明らかにされるので,その指示対象やスタイルの創り出す幻想は間違いなく最も厄介な問題である。ライヒェルト(1992)の場合がそうで,思考に形而上学的な源泉を与える空間的境界を脱構築しようとしながら,こうした境界を利用しないことが彼女自身にとって不可能であるのみならず,「思考すること」は境界と非連続性の利用なしには済まされないことを示しているのである。この場合に,構造主義者の着想による空間の言語学と人類学を論じたものについて何も脱構築されない。さらにここで私は,脱構築の錯綜した困難の批判的読解にはまったく別の注意が求められるように思われるので,地理学者ドリーン・マッシー(1993)のテキスト

を語ろうと思う。このテキストでマッシーは,何人かの論者において空間の概念が,とりわけ時間による空間の支配との関係で,男性/女性といった別の対立と同一の二元的構築物であることを示そうとしている。この場合,空間は固定化された静的な状態(否定的)にたとえられ,時間は動的な状態(肯定的)と同一視される。

空間と時間の二分法的な特徴づけは,既に簡単に述べてきた共示的相互関係を伴うその他のあらゆる二元論と同様に,とりわけ我々の生きる性差別社会の男性性と女性性の反映であると同時に,その構築物の一部となっている(Massey,1993:150)。

私がここで取り上げるのは,マッシーの結論でもなければ,用いられる方法でもない—それは構造的な方法であり,彼女の調査する複数の二元論のなかに構造の相同を確認する—。その研究は奇妙にもレヴィ=ストロースの仕事を想起させる¹¹⁾。そして空間と時間は相互依存しているとしても,一方との関係による他方の概念化は,必ず一方との関係による他方の価値の劣位につながるもので,両者はまったく異なっているとドリーン・マッシーが強く主張する時に¹²⁾,彼女は,差異化と関係の働きによって生じ,さらに支配の道具へと転化してしまう理解可能性の行使を確認している。この場合に脱構築されようとしているのは,おそらく現実的なもの(別な風になりうるだろうか)のなかに差異化によって生じる(象徴的であろうと論理的であろうと大して問題ではないが)思考ではなくて,この差異化が象徴支配の行使に影響を及ぼすメカニズムである。こうした企てが明瞭にされたならば,それは脱構築主義者風ではないが,それでもなおこうした問題構制を取り上げる人類学の研究分野につながる仕事と,もはやあまり離れていないだろう¹³⁾。この観点からきわめて豊かなマッシーのテキストは,こうした明瞭化を可能にするにちがいない。

脱構築は,その最も「急進的な」場合(オルソンの場合)に,生き生きとした批判を提起しないわけではない。そして脱構築がより古いパラダイムを再審に付さずに提供するものを,脱構築から得ている仕事をもっとよく理解するために,そうした批判の影響を認識しなければならない。「エリート主義」,「二

ヒリズム」,「主体の死」は,自由で変動する非人称のアイデンティティを発見するために支配の諸過程の効力を沈黙したままでやり過ごすような企てに関して,最も注意を喚起する鍵の言葉である¹⁴⁾。なぜなら,「脱構築」の企ては,二元論的思考を通じて行使される支配の状態を乗り越えることにあるからである。その企ては,現実的なものは二元論的思考の生み出さざるをえないものとは全く異なると仮定する。結局こうした思考は,象徴支配の作用が社会的(そして性的)分化を通してほとんど捕まえることのなかったひとつの世界の再発見へと,我々を導くこともほぼ明らかである。なぜならすべてが流動,運動,生成状態として現れるからである。

意外なことに,最も生き生きとした批判はフェミニストたちの側からやってきた。フェミニストは,脱構築の複雑な駆け引きを探究しながら,その担い手になる可能性のあった新たな本質主義を拒絶した。つまり同一性が他者性になるとしたら,もはや男性も女性もなく,「他者」の終焉である…。こうした議論の段階が現れるとしたら驚くべきことであるが,それはそこまで進んでいるのである。この点に関して,フェミニスト地理学者であるボンディとドモシュ(1992)の論文はきわめて明瞭である。彼女たちはポストモダニズムから,男性の権力の正当化が男性性と女性性という二項対立の任意の構築に依拠していることを暴き出す力を引き出すが,脱構築主義者の企てに従うことを最後まで拒絶する。彼女たちは「急進的」な企てを厳しく批判する際,たとえばオルソン(1987)の叙述の曖昧な言葉に,いまだ秘密を伝授するためだけに保存されている知の領域の排除のメカニズムの再生産を見るのである¹⁵⁾。とりわけ彼女たちは男性による女性の経験の一種の領有を拒否する。男性はその時から多義性や不正確な境界というみせかけの下で女性の経験を持ち出しているのである(その戦略は,ボンディとドモシュ(1992)によって引用された「女性の身体を持たずに女性となる」という警句に帰着する)。同じ動きのなかで,フェミニストのベル・フックス(1990)の有名な著作は,その依拠する空間メタファーの力ゆえに,最近再び地理学者(Jackson,1993,とりわけ Soja and Hooper,1993)によって利用されるが,それも脱構築主義者の企てと距離を保っている。脱構築が問題だ

としても,それは,「主体」を喪失したり承認したりせずに,厳格な決定論を超えて,抵抗や差異を創造するような意図的な再領有という様式で,主体が周辺化された空間を作り出す経験を理解するためだけである。ポストモダン地理学の企てを明確にするために,ソジャとフーパー(1993)に役だったのはこの立場である。

二項対立それ自体を破壊し混乱させること,(共感的な)脱構築と再構築を通じて閉ざされたさまざまな二元論の単純な構造を拒絶することが重要であり,それによって裂開,流動性,急進的な多数性が可能となる。鍵は,新たなオルタナティブ地理学—政治的選択の「第三の空間」—を認識しそれに地位を与えることであるが,それは客観主義と主観主義の間と,それらの内部とにあるももとの二項対立によって規定された複数の地理学とは異なっているが,それから完全に切り離されたわけではない(Soja and Hooper,1993:198)。

そうすると脱構築とはただのつまらない大騒ぎなのだろうか。すでになされたいくつかのコメントを読むことで,私はそれに肯定的に答えるだろう。結局,ポストモダニズムはあたかも自分のしっぽを嘯む堂々巡りのようである。つまり,社会の再構成,「土台に対する策略¹⁶⁾」,社会機構の隙間や編み目を利用する戦略と働き,を発見するために,社会経験をもはや単純な決定論へ還元しないことを要求するきわめて単純な(過度な単純化ではないが)提案を再発見しないだろうか。マーカス(1992),カツツ(1992),クラング(1992)そしてキース(1992)の興味深い論文がその最良の例であるが,ポストモダンの影響が反省的社会学(確かにブルデューのそれとは異なる¹⁷⁾)の現実的な関心によって動かされているとしても,こうした関心があらゆる言説に生じているわけではないことは残念である。ポストモダニズムは,権力闘争,つまり間違いなく理論上の進歩を蝕む意図の訴えの中心にあることを示しているので,距離を取ることのできない,客観化できない諸言説によって満たされていることに気づく。周辺化されて,支配された声がある意味で真理の唯一の保持者とみなされる時に,そこから語ることが正統的だとみなされるひとつの位置を提示し,それを保持する関心=利害が存在している。こうした戦略は,とりわけ数人の女性のなかで行われているように私には

思われる。そこで再びフーコーの思想を参照するとしたら、女性の知の構成のなかにも権力の秩序に属するなにかが存在しているにちがいないのである。この点についての省察は確かに可能であるが、だからといって科学の場も含めて行使されている男性の象徴支配という現実を否定するわけではない。だが、ポスト構造主義哲学の魅惑とそこから生まれるある種の道徳(客体/主体の分離は幻想とみなされるので、もはやものを「客体化」できない)は、その賭金を理解するために必要な議論の重要性の復活と距離を置くことを妨げるのである。他方で、開始されている二元論の真の追究は、さまざまなカテゴリーにおける支配と閉域化の過程という領域から、人間の思考の基盤それ自体という領域へとその主題を変えてしまっている。時には脱中心化された単純化によって議論されたこの領域について、象徴的思考に関するレヴィ=ストロースの叙述は大きな不在を抱えたままである。二元的思考の図式を吟味しようとすると、対立する二つの命題(レヴィ=ストロースの命題と脱構築の命題)、純粋な理論的考察の上にか生じないが、フランスの知的風景において社会科学と哲学の間の関係の上で生じる対立が、おそらく現れるにちがいないだろう。

脱構築は複数の展開を取ることができるのであって、それらは以前よりも優れた理論的な位置設定を受け入れることが再認識されるだろう。そこでは、男性性/女性性の図式に基づいたアイデンティティに取り組む研究分野に含まれる仕事がいまだに重要である。しかし、一方で主体の差異というパラダイムを選択し、他方で「多元的流動」にその差異を解消するパラダイムを選択するような、複数の原理をあれこれかたがた拒絶するような場に直ちに自らを位置付けるよりも、むしろ「二つの間にあること」が探究される。つまり、それは、主体それ自体が社会的構築物の支配から離れて、自らに付与された任意の社会的帰属を脱構築する空間を創造するような場である。この面で、同性愛、女性性、男性性の経験は、性的アイデンティティに対する象徴支配の効果に抗うために行われる作業と侵犯の潜勢力を示すために自由に利用できる資源である(Martin:1992を参照)。地理学分野では、脱安定化と抵抗の空間を導き出すために、ジャマイカにおける音楽と同性愛の

つながりを探究したスケルトン(1994)の仕事がここに位置付けられるだろう。私は他の場所で、一般にポストモダンの文献のなかで、同性愛の経験、つまり間違いなく「物神化」されつつある経験の象徴的な特徴を指摘した。いずれにせよ、現在の著名なニックネーム(ボンディ、ハーヴェイ、キース、マッセイ、パイル、ソジャ)が名を連ね、レズビアンのカップルの写真によって飾られた最近の地理学の論文集の表紙は、こうしたことを考えさせてくれる(Keith and Pile,1993)。女性のエクリチュールは、脱構築のこうした企てを語るための別の場を構成している。女性たちの著作、特にフランスフェミニスト(シクスーとイリガライ)のそれは、男性性/女性性の理論の探究が無駄であり、不要であると思われるとしても、女性性と女性の身体に関する構築物に対して放たれた挑戦の証言として解釈される。したがって、彼女たちは、特に女性の集合に一般化するのが不可能であり、女性性と男性性の二元論の作用へ還元することも不可能な「なにか」を練り上げようとしている(Gatens,1992)。この分野に関するP.シュルマー=スミス(1994)のより地理学的な研究は、空間的メタファーが脱構築の作業を成し遂げるのにいかに役立つかを研究するため、同じ女性のエクリチュールに依拠している。

彼女(エレヌ・シクスー)は、自らのエクリチュールによって社会構造と法を超えた女性の表象、自由という抽象物に到達するためさまざまな制限、囲い込みを通じてその固有の個性を争う女性を創造するために、空間の脱臼した見方を利用する(Shurmer-Smith,1994:354)。

私はここで地理学のためにキャシー・ベネットの学位論文¹⁸⁾の研究を引用しよう。彼女は農村世界の女性たちに関する人類学のフィールド研究から、複数の空間の間にいること、すなわち二元論の論理が断ち切られる不確かな諸空間を発見しようとしている。象徴支配の力とそれの生み出す諸構造の力を否定せずに、ベネットはドゥルーズとシークスの仕事に基づいて、複数の対立や二項論理がもはや影響力を持たない境界のない闕下の空間、抑圧が一掃されている空間の存在を仮定している。

したがって、脱構築のこの最後の見方において、

探究されるべきは社会のさまざまな決定がもはや影響力を及ぼさないようにみえる飛ぶ地となる。多少とも見る(あるいは読む)機会を与えられ、また多少とも潜在的な秘密の飛び地であり、それは、想像の産物と思考しえないものの場所において、我々の生活に課せられた意味作用を深層から脱安定化する作業をどこかで達成するために、自らに与えたいと望む断固とした自由に関係すると考えられている。これらの飛び地の存在に反論しないとするならば、私の提起する唯一の問いは、「脱構築する能力」、つまりある種の超越へ近づく能力が、可能性の社会的諸条件にまだ結びつけられていないかどうか、そしてこの脱構築が行使される基体に関する意味作用の連鎖にもはや結びつかないかどうかを知ることである。さもなければ、この自由の空間はいかにして位置づけられるだろうか、それが存在するとどうして知るだろうか、あるいはもっと単純に、それが存在するという感覚をどうして与え、それが存在するとどうして感じるだろうか。

フーコーの思想の影響

ミシェル・フーコーの思想は、間違いなくポストモダンの多様な企てを組織している。この哲学者の仕事から、二つの基本的視座が、少なくとも地理学の領域において繰り返し現れている。「知と権力」の対に関わる視座と空間をめぐる視座であるが、後者はフーコーの仕事を通じてあまり体系化されていない。第三の方向性は展開される価値のあるもので、「身体の訓致」に関するテキストの利用から生まれる方向性であり、それについて「セクシャリティ」(この名称は確かに不適當である)の地理学に関心の拡大がみられる。この分野の関心は、身体に対して性的アイデンティティの規範に一致する姿勢と深い機能を課すことで、場所が与える訓致の諸機能にある。より精神分析的アプローチに補完され、知と権力をめぐる概念を拓げることで、別の地理学の企ては、男性と女性の位置の位相を研究し、「男性の立場」を特徴づける距離を保つことと外在性を、男根中心主義と、男性が男性性や女性性の図式に基づいて構築された象徴支配を基礎にして横領する権力とに結び

つけている¹⁹⁾。ここで私は、フーコーの思想を利用するテキストの紹介という方法にまだ限定しながら、最初の二つの視座を選択することにする。

ポスト構造主義哲学に属するとはいえ、フーコーの作品は、複数の理論的潮流の交差点にあると同時に、多くの学問のちょうつがいによってそれを位置づける方法と探究された分野によって、そこから分離する。ある解説者たちは、フーコーの著作を、もはや主体の行為に自由の余地を残していない支配体系の仮借のない論理を証明するものだと考えるのに対して(Turaine,1984:61-62)、別の人たちは、それを構造主義の新たな焼き直しと躊躇なく呼んでいる(Boudon et Borricaud,1990:581、『知の考古学』の結論における批判的議論も参照、Foucault,1969:259)。いずれにせよ、フーコーの仕事(少なくとも特にその一部)は、脱構築以降の思想の事前あるいは事後に位置づけられるような言語を使用していない。むしろ言説編成、特に合理主義的思考の編成が、時代に応じて変化するその内容の妥当性を決定する権力の諸実践といかに結びつけられるかを示そうとするものである。

ここで私はつぎのような仮説を提出したいと思います(…)。すなわちあらゆる社会において言説の生産は、いくつかの手続きによって同時に統御され、取捨選択され、組織化され、再分配されるものと私は想定する。そして、これらの手続きは、言説の力と危険を払いのけ、その偶然に左右される出来事を支配し、その重苦しく、おそるべき物質性を避ける働きをする、と(Foucault,1971:10)。

したがって、それぞれの言説編成は、言表に圧力を加えてその受容可能な内容を限定する排除と禁止の手続きによって機能する。真と偽の間の分割はこうした排除の手続きのひとつと考えられる。それは、時代によって異なった真理の要求を生み出す歴史システムであり、修正と変更が可能である。科学的かつ合理的な言説形式の確立と考えられる近代的エピソードは、真理へのこうした要求のひとつを通じて特徴づけられる。それは異質な社会要素(狂人、犯罪者、放浪者)を、精神医学の確立のなかで直ちに専門化された精神病院の構造に閉じこめ、抑圧する実践の出現と対応する。こうした閉ざされた全体的制度のなかに、フーコーは、「統制の審級として

の理性の勝利に捧げられた体系を感知する」(Habermas,1985:290-291)。社会科学とその客観化のまなざしは、狂気と理性の間を区別するこの連関を基盤にして構造づけられている。そしてこの区別は、「一望監視」²⁰⁾の建築がその象徴となる「見られることなく見る」方法を自ら正当化する監視の実践を生み出すのである(Habermas,1985:290-291)。近代性とともに主体/客体の対も構築される。それ以後主体は、非-私を参照することによって思考し、そのように自己構築しながら世界に向かって主体を位置づけるとみなされる地位を創造する。そして人文諸科学は、自己生成する知の妥当性を信じさせるこの構築物からその普遍要求を引き出すのである。だがそれらは自己物神化と自己認識のこの意志を容認できない。なぜなら、この意志が「真理の要求」というそのシステム全体を再審に付すからである(Habermas,1985:294-314)。この観点から知を構成するものとして同定されるのが権力である。

むしろ、承認されなければならないのは、権力はなんらかの知を生み出す(ただ単に、知は奉仕してくれるから知を優遇することによってとか、あるいは知は有益だから応用することによってとか、だけではなく)という点であり、権力と知は相互に直接含みあうという点、また、ある知の領域との相関関係が構成されなければ権力関係は存在しないし、同時に権力関係を想定したり組み立てたりしないような知は存在しないという点である。「権力と知」のこの諸連関は、自由であるはずの認識主体をもとにしても、あるいは権力システムとの関係によっても分析されえない。だが、反対に考慮しておく必要があるのは、認識する主体、認識されるべき客体、認識の様相はそれぞれが、権力-知のあの基本的係り合いの、またそれら係り合い歴史的な転換の、諸結果であるという点である(Foucault,1975:32)。

ポストモダンの潮流に大いに利用され、これまで生産された知の根本的な再審へと展開するのは、フーコーによって提起されたこの知と権力の概念である。この考え方は多くの著作にみられる。ここで私は、地理学の考古学を提起し導入することで反響を呼んだ、ドエルとマトレス(1992)のテキストを取り上げよう。同様にハンナの企て(1993)も、フーコーの思想をめぐる理論的議論の事例だと言わねばならないだろう。確かにこの哲学者の著作は、「近代のプロジェクト」に関わる理論的企図への深い疑念の中

心にあり、科学的言説はそれ以後、もはやその内容に疑問を挟むことのできる真理によってではなく、「誰が、いつ、どこから語るのか」(Barret et Phillips,1992:7)を確定することを通じて、取り組まれることになる。フーコーの企てが基本的な理論上の土台を形成して、科学世界における男性の言説への批判がそれに依拠していることは容易に理解できるだろう。したがって、ボンディとドモシュ(1992)のテキストも、こうしたスタイルの例外ではなく、男性が占有し続けてきたヘゲモニー的地位の基盤の上に構成された地理学的知の脱構築に関わっているのである。

男性性は二つのやり方で権力と知という対にしっかりと根を下ろしている。第一に、こうした「真なる」知を生み出す能力が適切な技術的力能の獲得に依存する限りで、「神の視座」への接近はかなりの権限を手中に収めるきわめてわずかな人々の特権となる。現在の性的分業によると、女性は必要な場合に知の作り手になることができるにもかかわらず、その大部分は男性である。第二に、フェミニストによる知の分析は、こうした権限の地位が内在的に男性的であることを示唆している(時にそれが女性によって占められているとしても)。自律的で理性的な主体という男性が自身に持つイメージは、外見的に有利な地位への接近に依拠しており、女性を「他者」として、情緒、情熱、直感などのあらゆる「不適切な」人間の特徴の受託者として定義するように求める(Bondi and Domosh,1992:203)。

フーコーに向けられた根本的な批判と彼が示すことのできた応答は、彼が空間から発展させた概念を理解することを容易にしてくれる。フーコーは、彼固有の位置の上で、すなわち理性の理性あるいは真理の真理を語る事が可能になった場所から呼びかけながら、新たな思考の企てになりうるものを表明している。彼は、言説的な出来事の総体によって構成された広大な領域のなかに、いかなる言説であれ、そこでは水平的に把握される空間的布置にはっきりと言及する。この空間を明らかにすることは、「この空間においてそしてその外で、関係の働きから自由になる」(Foucault,1969:39-41)ことを可能にする。したがって、探究されるべきことは、同じ空間においてひとつの全体性に出会うために、ある意味で特定の言説編成の歴史から抜け出られるような位置である。

私の言説は、その語る場所を確定するどころか、それが支えとすることのできるような大地を回避する。それは言説についての言説である。が、それはそれらのうちに一個の隠れた法則や、一つの再発見された起源—それが解放するよりほかない起源—を見出そうとしない。それはまた、それ自身によって、またそれ自身から出発して、諸言説が具体的モデルとなるような一般理論をうち立てようとする。重要なのは、差異の唯一のシステムに決して還元されえない分散、絶対的な参照軸に関わらない散乱、をくりひろげることであり、いかなる中心にも特権を与えない脱中心化を行うことである(Foucault, 1969:267-268)。

フーコーが空間と確立しようとしたこの関係は、「別の仕方で考えるという企て」²¹⁾と関連するようと思われる。現代は別の思考様式を生み出しつつあるというポストモダンの直観と一致するので、この企てはドゥルーズとガタリ(1980)²²⁾のリゾームのメタファーと再び結びつく。そのうえでソジャ(1989:10)は、フーコーが、空間と同時性によってこれまでにないほど支配された時代である現代—ここでは世界経験は歴史よりもネットワークの絡み合いに結びつく—に認める種別性について彼の言葉を取り上げている²³⁾。フーコーがテキスト全体のなかで特に空間に割いた部分はきわめて少なく、空間的資源を利用するこの新たな思考の着想はほとんど述べられていない。この観点から、『ヘロドット』誌のフランス地理学者とフーコーの対話は、イギリスで基本的なテキストのひとつとなっている。そこでフーコーは、とりわけ権力が行使されるのに必要な空間的布置を取り上げているけれども、歴史化の方法である垂直性に対して、まなざしを水平的な見方に調整するこの視座の変化について若干省察している。

時間に関係する語彙を用いて言説の変形を隠喩化すれば、必然的に、固有の時間性を持った個人の意識というモデルを利用することにならざるを得ません。反対に、空間的、戦略的な隠喩を通じて言説を解釈すれば、権力の諸関係のなかで、この諸関係を通じて、そしてこの諸関係から出発して言説を変形させるいくつかの点を、正確に捉えることができるのです[...]。言説の事実を空間化していく叙述は、権力の諸効果の分析の上に開かれるものなのです(Foucault, 1976:77-79)。

この同じ対話から、空間と比較して時間や歴史に認められた優位に対する批判がはっきりと明言され、繰り返し解説される。

空間の格下げは何世代にもわたって勢力をふるってきたが、それに対する批判が必要かもしれません。それはベルクソンと共に始まったのか、あるいは、その前に始まっていたのか。空間とは死んだもの、硬直したもの、非弁証法的なもの、動かないものだったのです。反対に、時間は豊かなもの、肥沃なもの、生き生きとしたもの、弁証法的なものでした(Foucault, 1976:78)。

この「短文」は、アングロ・サクソン側に比類のない反響を生んだ。そしてこれが、ソジャ(1989)のポストモダン地理学の企てと「批判的社会理論における空間の再強調」²⁴⁾のための主張の基盤になったといっても、私は過言ではないと思う。同じくこの短い文章に含まれる支配的な二元論の告発は、例えばマッシーが時間／空間と男性／女性に作用する同一の構築原理を確認する時に、彼女のテキストに再発見される発想の源にもなっている。しかし、ポストモダン地理学におけるフーコーの存在は、空間について彼の残したテキストの少なさからすると不釣り合いだと考えられる。おそらくこの著名な哲学者の名前が口実としてしか用いられないとしても、彼の仕事とポストモダン地理学者たちをつなぐ糸はごく細いものではないだろうか。なぜなら、フーコーの仕事全体が、より「古典的な」概念にしたがって空間に準拠し、空間がいかんにして権力の行使に用いられる無視できない手段、ベクトルになるのかを示すものだったことを、知らずにいるわけにはいかないからである。『監視と処罰』の建築かつ空間の配置の記述は、権力関係の構成における空間配列の力を示しており、そのなかの一瞥監視装置(パノプティコン)(注 19 を参照)は最良の事例である。こうした地理学的方法は、空間が社会的なものを構成するという企てと断絶するところはなく、その企ては、空間の意味論化の作業の全体、すなわち記号化や社会生活の定義それ自体に関与する象徴的なコード化を可能にする作業に明示的に準拠している。それは、バルトとその空間の記号学から、レヴィ＝ストロースとその有名なボロロ族の村落、マルク・オジェの非-場所へと至り、ベルクの日本の空間やラフェスタ

ンの領域／権力も忘れられない。したがって、空間についてフーコーを最もはっきりと参照しているのは、ここまで我々がポストモダンと命名する習慣のなかった企てと密接に関係しているのである。

以上のことは、地理学分野でフーコーの思想に最も敬意を払ったテキストを記したクリス・フィロー(1992)も免れない。この地理学者にとって、フーコーの把握しようとした空間に関する「幾何学的」かつ近代的な展開をめぐる仕事を回復する試みが重要である。したがって、地理学がこの哲学者の思考のなかに統合者としての役割を見いだすことは、より微妙な考え方である。つまり秩序や継起ではなく、諸関係の同時性を認める考え方、ネットワークや結合、「物の単なる衝突」²⁹を発見するために慣習的な序列と切断する考え方である。「別の仕方では考える」という企てに戻ること、「反近代主義的、ポストモダニスト的あるいは単に別のとして、そして複数のカテゴリーを越えることで記述されるような思考の方法」(Philo,1992:159)、カテゴリー化の思考の苦悩によって到達し得ない一種の未知の圏域に達することが問題となる。

そこで、ポストモダン地理学の企てはもっとよく理解される。この複数形の地理学は、前衛的な哲学によって発せられた挑戦を真摯に受け止めることを求める。それは、象徴支配の連鎖を断ち切るとみなされるより良き思考への望みのようなものを含む、「上-下(方向・意味)のない」諸空間を探究しようとする。だが、脱構築される直前まで社会的であり続ける外部から切り離された若干の知識人だけが脱構築を行うのが、ユートピア空間においてでないとしたら、我々はどこにいるのだろうか。

ポストモダニズムのこうした越境は、「別の地理学」へのこのアプローチが提起する問いの全体を、未解決のまま残すように私には思われる。なぜなら、もし私の従事してきたことが理解や好奇心に訴えないとしたら、そしてポストモダンの著作を簡単に厄介払いする手段として用いられるとしたら、それは失敗を余儀なくされるからである。この思想運動の過剰、パラドクスそして矛盾に立ち止まることは確かに間違だろう。知の生産過程を調査し、科学的言説を、歴史性を背負い、社会的かつ政治的な場の事実の依拠している語りの様式という観点に位置づ

けることで、この新たな知的影響は、その企てをひとつの方向に進めている。その方向における認識論的要求は、確かに必要な程度にけっして到達しなかったし、認識編成のなかに中心的な仕方では位置づけられなかった。そこにポストモダン運動の最も積極的な側面のひとつがある。しかし、イギリスの状況において、ブルデュー式の反省的社会学を実践するための動機と構成要素があるとしても、だからといって自己への回帰を、科学的生産を循環する社会的価値の支配(こうした支配は可能だろうか)の証拠とすることには誰も同意しないだろう。反対に、ある人々にとって、科学的な場の構成をすぐれて社会的な場として再認識することは、抽象化のあらゆる努力を非難し、科学が世界の表象のヘゲモニー体系にすぎないことを明らかにする。以上の文章は、私の意見では、ポストモダンの思考の最も徐々に拡がっている地滑り、すなわち「マイノリティ主義者」の言説を構成するものに触れている。二元論の排除の後に、持続する二元性があるとしたら、それは少なくとも最も反論の余地がなく、社会世界に適用される支配／被支配の二元性である。「主体も客体も」ないという主張ともはや矛盾を恐れることなく混じりあう他者の声を守ること(さらに自己を守ることが覆い隠すことのできる)は、恐怖に陥られる／恐怖に陥れる調子で、アカデミー的に正しいひとつの言語をしかるべき場所に据えることに協力するのである。この場合に、ポストモダンの影響によって提起された問い—客体としての他者の構築と、こうした構築物が社会的な場と維持する応答—の議論の余地のない妥当性は、一種の一元論に陥る危険があるだろう。それは、この影響に基づいて、多くのテキストのなかに現れている批判的企て、いずれにせよ、我々が自らの手続きを突き合わせるのに十分な議論を刺激し続けると期待される批判的企て、を考慮に入れることはないだろう。

ポストモダニズムはどこまで進んだのか？

今、提起される最後の問いは、現在ポストモダンはどこまで進んだのかを知ることである。イギリス地理学のより直接的な現状からどのような傾向が現

れているだろうか。ポストモダンの転回を決定的な関与と考えることができるだろうか。我々は、最新の地理学のテキストの出版時期から、ポストモダンのパラダイムの確立と強化を大雑把に取り上げることができる。第一に、周知の「文化論的転回」以後にその名声を得たイギリス地理学のビッグネームを集めた二冊の作品を取り上げよう。この二つのテキスト集成 (Pile and Thrift, 1995, Pile and Keith, 1997) は、1980年代末に導入された問題提起が安定化したこと、10年前には優位であった地理学の考え方とはまったく異なるものへ移行していること、を確認していて、私の感じでは、ポストモダニズムに従う軌跡を示している。ここまで我々にひとつの目印を与えてくれた『社会と空間』誌の諸論文の読解によって、分析の二つの基本要素を引き出すことができる。そして、それはこの新たな考え方が確信を得られる仕方について情報を与えてくれる。第一の要素はある規範化の状態から生じる。すなわち革新の時期を通り過ぎて、型にはまったテキストが地理学的言説の受容可能性の新たな規範を統合し、新たなパラダイムへの移行が十分に完成するのである。それ以後そこから、1990年代初頭に生じ、いくつかの象徴的傾向—何本かの論文はそれを反映している—によって受肉化された歯車で、「転回する機械」という印象が生まれる。例えば、資本主義の論理の最も予期されなかった効果を論じるために、「身体」といったようないくつかの新たな将来性のある主題に合わせて、再検討かつ修正されたマルクス主義的読解の適用 (Callard, 1998; Harvey, 1997), 「ファンタジー」や「カーニバル性」と結びつけられた「転覆をはかる」民衆的实践を通じた「主体」の称揚 (Gregson and Crewe, 1997), 「新-帝国主義的」概念 (Berg and Kearns, 1998) をめぐって構築され、「アングロ-中心主義的」かつ「男性至上主義的」な言説 (Maddrell, 1998) と歴史的に結びつけられるような地理学知への批判、学問における「ゲイ」と「レズビアン」の知の周縁化 (Binnie, 1997), ポストモダニズムと、「ポストコロニアル理論」 (Simon, 1998) のようなそこから派生した理論とによって提起された思考をめぐる理論上の議論、ボードリヤール (Smith, 1997) やスピヴァック (Barnett, 1997) のような「ポスト」という指示対象

の論者のテキストの議論, である。

これらの主題を列挙すると、これまで述べてきた傾向から大きく離れることはないように思われる。しかし、最も急進的な「脱構築」の試みからの後退に気づくだろう。何人かの論者(デリダ)への参照は稀になる一方で、ド・セルトー、さらにはラトゥールのようなフランスの知識人がより目に触れるようになる。ラトゥールの貢献は言及されねばならないだろう (Latour, 1993)。英語圏のドナ・ハラウエイの著作との遭遇によって、「アクター・ネットワーク理論」という言葉で示されるもっとも最近の傾向を創出し、それは何人かの地理学者の主張する「非表象理論」(Thrift, 1997)の潮流を含んでいる。それ以後、この理論は、多くのテキスト (Murdoch, 1997, Whatmore, 1997, Swyngedouw, 1999) に結びつけられて、至る所で作用するハイブリッド性の原理の再認識を提案しており、ハラウエイの名前と結びついた「サイボーグ」(有機体と技術の混合) というシンボルはこの原理を表している。この理論的なフィルターを通じて、近代的思考の二元的カテゴリーの外で思考することが要求される。だが、ここで地理学的言説は、その言説の外にいかなる存在も持ち得ない世界の輪郭を描くために、そのパフォーマンスな効果だけから刺激を受ける傾向がないだろうか。

分析の第二の要素は、ある成熟を点検することにある。そしてこの成熟は、ポストモダンの潮流によって到達されたと同時に、その爆発に抗してより明確にされた批判の展開能力によって示される。ハイブリッド性のような新しい「フェティシズム」を告発するテキスト (Mitchell, 1997) や、知性によって思考されたカテゴリーへ注意を払いながら回帰を促すテキスト (Sayer and Storper, 1997) は珍しいものではない。こうした批判的な警戒のしるしとして、『社会と空間』誌で「ソーカル」風の悪ふざけの試みがある。ニール・スミス (1996) は、編集記を割いて地理学者たちに「侵犯」としての眠りの実践の考察を勧めた。その勧めは、最も「接続された」文化研究のパロディの様式で表現されていて、地理学がポストモダンの洗練された表現力によって眠らせられつつあることを理解させてくれる。しかし、この編集記の反響はいぶかしさを残している。著者が悪ふざ

けかどうかを明確にしなかっただけでなく(Smith, 1997), 「主観主義的」(Pile, 1997)アプローチの代表者の応答は, その挑戦を取り上げて, 「ポストモダン」の中傷者から正当性を剥奪して, 眠りの問いの考察が豊かで妥当性をもちうることを示した。だが, 編集記での小さな出来事の後に持続するこの疑念は, 思考の真の論争に開かれた構成要素の全体を維持することで, イギリスの地理学的思考の健全さのしるしとなっていないだろうか。結局「ソーカル風の」企てが, 「概念の政治」を要求しながら, そこから激しい反対が生じなかったことに人は喜ぶと同時に, 誰かがこうした脱安定化の企てを試みることに満足させられる。我々の地理学的実践に不可欠な批判精神が, 安定化しつつある概念上の革新というこの状況で働いていることが判る。そして, イギリス地理学をきわめて信頼しうるものになっているのは, この精神である。すなわち, この力によって, 新たな地理学的知の限界と矛盾を探索する手段を自らに与えながら, 新たな概念の土台に到達するのである²⁶⁾。

ポーツマス(合衆国)1994年8月, 1995年および1998年にボルドーで再考。

注

- 1) 利便性のために, 英語からの引用はすべてフランス語に翻訳した。
- 2) 人類学のただ中に解釈的方法を位置付けるために, 私はトレモン(1992)の論文を参照した。トレモンにとってポストモダン民族学の種別性は, 調査の中心に観察者を置くことによって, 観察者の位置を考慮することにある。「民族学者はもはやひとつの文化ではなくて, 文化に言及する複数の記されたものに没頭している。土着の人々や民族学者たちによって発せられた言説が研究の中心的な主題となる」(Traimond, 1992:11)。民族学者である「私の／私は」によって解釈されたテキストとしての文化に関するいくつかの留保については, ブルデューとワックアン(1992:52)やオジェ(1994:82-83)を参照。またフランスで解釈的方法に内実を与えた代表であるスバルベルの論文も参照のこと。
- 3) ポストモダンの語彙と参考文献を検討しながら, このアプローチがきわめて古典的であると私は明言しなければならない。おそらくその理由は, この著者たちが特にポスト構造主義者の仕事(目下強制されている道筋?)を引用しながらも, より構造主義的なアプローチで結論を出していることにある。つまり風景の解釈の可能性は無限ではなくて, 常に特定の意味体系の内部に位置づけられていること, そしてこの可能性はこの意味体系の供給する読解の格子に依存するといえること, である。風景研究における新たな方向性の展望については, ジャクソン(1993)を参照。
- 4) この「客観化」の探究は, フランスにおける解釈人類学の潮流を特徴づけるものであろう。スバルベル(1993)を参照。
- 5) この点に関して, 私は, 同僚のサラ・プロウエン(ポーツマス大学言語学部)が1994年3月にロンドン博物館で, 「女性, 遺産, 博物館」グループの第20回年次会議「女性と博物館学」というテーマで行われた研究セミナーについて, 私に喜んで教えてくれた解説に対して感謝する。
- 6) フランスではフェミニズムに通じたグループだけにわずかに知られている数人のフランス女性が, アングロ・サクソン系の大学で著名人となっている。私は特にシークス, クリステヴァ, イリガライを念頭に置いている。その著作は, デリダの著作, とりわけ『ポジション』(Derrida, 1972, クリステヴァとの対話)や『性的差異の読解』(Cixous, Derrida *et al.*, 1994)と結びつけられる。フランスにおけるフェミニスト運動の社会的読解とフェミニズムをめぐる省察に関しては, ガルシア(1993)の研究を参照。
- 7) 男根中心主義は, イギリスで流行の概念であり, ジョーンストンほか(1994:437-438)は人文地理学事典にそれを掲載している。そこではこの概念がフランスフェミニズム, 特にシークスの著作に多くを負っていることが示されている。
- 8) 私はその言葉をガルシア(1993)から借用した。彼女はそれを, 「女性の種別性について言説とそれが流布する排除の実践とを通して, 女性に歴史的に課されてきたアイデンティティを, 女性自らが手中に収めることを目指した企て」としている。これ以降, この「象徴革命」の効果の場として科学の世界を考察することは, 男性支配と女性アイデンティティの任意の構築の諸過程に光を当てて研究するだけではもはやなく, 科学の世界をスティグマ化の場, つまりこの同じ過程の生産の場として捉えることになる。
- 9) 人類学がアイデンティティの構築に関係づけられることを認めるとしたら, それは他者性の構築にも強く関係づけられる。「差異」との関係で「同一性」を意味づけるために境界を引くことになるこの作業(さらに空間の意味化の過程で強力に働く作業)の結果でないとしたら, アイデンティティとは何だろうか。それゆえ, 他者性の構築のいかなる水準で, 民族学者の介入は可能になるのだろうか(この問いを豊饒化するためにオジェ, 1994を参照)。
- 10) 私はここで, 自分の利用したテキストの大部分が, イギリスの雑誌 *Environment and Planning D: Society and*

- Space* に掲載されたものであるが、その著者たちは必ずしもイギリス人ではないことに注目する。
- 11) シバロン(1999)注 20 を参照。
 - 12) 「空間は静能的ではなく、空間的次元を欠いた時間はない。もちろん空間性と時間性は相互に区別されるが、いずれも一方を欠いたままで概念化されることはない。」(Massey,1993:193)
 - 13) この点について、ブルデューの発展させた象徴暴力の概念を参照(Bourdieu et Wacquant, 1992:46-147)。
 - 14) ベニングトンとデリダ(1991:42-43)は、デリダの哲学が対象とした批判の本質をまとめている。「脱構築の事例(記号の事例)(….)は、デリダの仕事がしばしば言葉のパラドクスと働きに関する洗練された名人芸的な手仕事として考えられてきた理由を理解させてくれる。つまり、この手仕事は形而上学の伝統を手玉に取る意地悪なよろこびであり、思想と行為を麻痺させる虚無主義、あるいはよくても哲学の「芸術家的な」実践と文学の耽美主義へとつながるものと考えられている。構築された批判の諸要素を見るためには、ハーバマス(1985)を参照のこと。またブルデューとワックアン(1992)に有用かつ啓発的な指摘がある。
 - 15) この点について、スパーク(1994a,b)とオルソン(1994)の間の論争を参照。スパークはオルソンが男性的「ナルシズム」と「のぞき趣味」からなる新たな「家父長制的な」企てを行っているとは非難する。スパークの論文は、批判的な力や微妙な差異の豊かさにもはや余地を残していない点で、「少数派至上主義」(女性、黒人や同性愛者などを守れ)の方向性をよりはっきりと示していて、それは完全にイギリスのアカデミックな風土の兆候であるように私には思われる。
 - 16) 私はベルトラン(1994:45)の表現を借用した。
 - 17) ブルデューの著作はイギリスで頻りに利用されている。しかし、私はそれが地理学でジェントリフィケーション過程におけるブルジョワジーの「ハビトゥス」を研究するためにだけに活用される傾向があることを発見した。ブルデューの勧める反省的な手続きに関して、それはある人々には社会的知を正当化する手段として見られている。「ブルデューとの問題は彼の社会学主義であり、それに関わる反省性は理論と方法に役立つ手段以外のなものでもない」(Marcus,1992:491)。反対に、社会学者のラッシュ(1990:264)は、反省性を「ブルデューがレヴィ=ストロースとアルチュセールの近代主義的な諸概念」に放った「ポスト構造主義の挑戦」として解釈することで、それに特に注目する。
 - 18) ポーツマス大学地理学部のシュルマー=スミス指導による 1994-95 年の文化地理学の博士学位論文である。
 - 19) 身体とセクシャリティの地理学にはじめて親しむためには、ジョンストンほか(1994:553-554)の短い入門的な文章を参照。また入門として、シュルマー=スミスとハンナム (1994)の特に第 7 章も参照。
 - 20) ベンサムの一望監視システムは監獄の建築装置であり、監視者たちを彼らから見られることなく監視することができる。「一望監視システムは見る-見られるという一对の事態を切離すための機械であって、その円周状の建物の内部では人は完全に見られるが、けっして見るわけにはいかず、中央部の塔のなかで人はいっさいを見るが、けっして見られはしないのである」(Foucault, 1975:203, Habermas, 1985:290 も参照)。
 - 21) 「別な仕方で考える」とは、ドゥルーズ(1986)のフーコーに関する書物の一章のタイトルである。最後の作品である『快樂の用法』の序文で、フーコーは自らの哲学の企図を次のように示している。「もし哲学それ自体に対する思考の批判的な作業でないとしたら、また既知のことを正当化する代わりに、別な仕方で考えることが、いかにしてかつどこまで可能なのかを知る試みでないとしたら、哲学とは何でしょうか […]」(Eribon,1989:352 による引用)。
 - 22) ドゥルーズ(1986)はフーコーの仕事を論じたその著作のなかで、フーコーの諸概念をトポロジーに倣って位置づけながら、空間的配置に言及することでこの哲学者の思想を提示している。
 - 23) フーコーのこの言葉は、会議での「異他なる空間」をめぐる短い報告から引き出されたので、私は本稿作成の際にフランス語の厳密な典拠を探ることができなかった。文献一覧に英語翻訳の典拠が掲載してある(Foucault,1986)。フーコーが「エテロトピー」という概念を導入したのはこの短いテキストにおいてである。それは、現実のなかに位置が決定される異質な場所であり、タリース(1994:6)の表現に倣うと、「一種の反-場所、実際に現実となったユートピアであり […]、すべての現実の空間を見せかけだと暴露する幻想の空間を創造する役割を演じるだろう」。この概念はフーコーにとって十分に展開された対象にならなかったと私は考えている。
 - 24) 先行論文(Chivallon,1999)を参照。
 - 25) 地理学者のフィローは、フーコーが小説家レイモン・ルーセルについて書いた文章にこの着想を再発見した。
 - 26) 私は、ポストモダニズムに関する探究から生まれた別の二つの研究を挙げておく。第一は、諸概念の意味がアカデミーでの生産の文脈(イギリスとフランス)に応じて変化する内容をいかに与えるかを取り上げた研究である(Chivallon,1997)。第二は、アカデミーにおける生産の脈絡に応じて地理学的言説の間に生じるズレをめぐる省察を目指した、イギリスとフランスの地理学者の出会いから生まれたテキスト群である(Chivallon, Ragouet, Samers,1999)。

文献

Agué, M.(1992) *Non-lieux.Introduction à une*

- anthropologie de la surmodernité*. Paris, Seuil, 153p.
- Augé, M.(1994) *Le sens des autres*. Paris, Fayard.
- Barnes, T.J. and Curry, M.R.(1992) Postmodernism in Economic Geography: Metaphor and the Construction of Alterity. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(1):57-69.
- Barnett, C.(1997) Sign along with the common people: Politics, Postcolonialism and the Other Figures. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(2):137-155.
- Barrett, M. and Phillips, A., eds.(1992) *Destabilizing Theory. Contemporary Feminist Debates*. Cambridge, Polity Press.
- Barthes, R.(1985) *L'aventure sémiologique*. Paris, Seuil.
花輪光訳(1988)『記号学の冒険』みすず書房
- Bauman, Z.(1992) *Intimations of Postmodernity*. London, Routledge.
- Bennington, G. et Derrida, J.(1991) *Jacques Derrida*. Paris, Seuil.
- Berg, L.D. and Kearns, R.(1988) America Unlimited. *Environment and Planning D: Society and Space*, 16(2):128-133.
- Berque, A.(1993) *Du geste à la cité. Formes urbaines et lien social au Japon*. Paris, Gallimard. 宮原信・荒木亨訳(1996)『都市の日本 所作から共同体へ』, 筑摩書房
- Bertrand, M.(1994) Territoires, espaces, sociétés: première approches des mobiliés géographiques. *Cahiers de la Maison de la Recherche en Sciences Humaines*, Université de Caen, 3:35-53.
- Binnie, J.(1997) Coming Out of Geography: Towards a Queer Epistemology? *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(2):1223-1238
- Bishop, P.(1992) Rhetoric, Memory, and Power: Depth Psychology and Postmodern Geography. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(1):5-23.
- Bondi, L. and Domosh, M.(1992) Other Figures in Other Places: On Feminism, Postmodernism and Geography. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(2):199-215.
- Boudon, R. et Bourricaud, F.(1990) *Dictionnaire critique de la sociologie*. Paris, PUF.
- Bourdieu, P. et Wacquant L.(1992) *Réponses*. Paris, Seuil.
- Callard, F.J.(1998) The Body in Theory. *Environment and Planning D: Society and Space*, 16(4): 387-400.
- Chivallon, C.(1997) De quelques préconstruits de la notion de diaspora à partir de l'exemple antillais. *Revue Européenne des Migrations Internationales*, 13(1):149-160.
- Chivallon, C.(1999) La géographie britannique et ses diagnostics sur l'époque postmoderne. *Cahiers de géographie du Québec*, 42(118):97-119.
- Chivallon, C., Ragouet, P. et Samers, M. eds.(1999) *Discours scientifiques et contextes culturels: géographies britanniques et Françaises à l'épreuve postmoderne*. Talence, Éditions de la Maison des Sciences de l'Homme d'Aquitaine.
- Cixous, H., Derrida, J., Aneja, A., Berger, A. et al.(1994) *Lectures de la différence sexuelle*. Paris, Éditions des Femmes/Antoinette Fouque.
- Crang, P.(1992) The Politics of Polyphony: Reconfigurations in Geographical Authority. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(5):527-550.
- Deleuze, G.(1986) *Foucault*. Paris, Minuit. 宇野邦一訳(1987)『フーコー』, 河出書房新社
- Deleuze, G. et Guattari, F.(1980) *Mille plateaux. Capitalisme et schizophrénie*. Paris, Minuit. 宇野邦一ほか訳(1992)『千のプラトール』, 河出書房新社
- Derrida, J.(1972) Positions. Paris, Minuit. 高橋充昭(1981)『ボジション』, 青土社
- Doel, M. and Matless, D.(1992) Geography and Postmodernism. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(1):1-4.
- Ducan, J. and Ducan, N.(1988) (Re)reading the Landscape. *Environment and Planning D: Society and Space*, 6(2):117-127.
- Eribon, D.(1989) *Michel Foucault (1926-1984)*. Paris, Flammarion. 田村俊訳(1991)『フーコー伝』, 新潮社
- Foucault, M.(1969) *L'archéologie du savoir*. Paris, Gallimard. 中村雄二郎訳(1995)『知の考古学』, (改訂新版)河出書房新社
- Foucault, M.(1971) *L'ordre du discours*. Paris, Gallimard. 中村雄二郎訳(1981)『言語表現の秩序』, 河出書房新社
- Foucault, M.(1975) *Surveiller et punir. Naissance de la prison*. Paris, Gallimard. 田村俊訳(1977)『監獄の誕生』, 新潮社
- Foucault, M.(1976) Questions à Michel Foucault sur la géographie. *Hérodote*, 1 : 71-84. 國分功一郎訳(2000)「地理学に関するミシェル・フーコーへの質問」『ミシェル・フーコー思考集成VI』, 筑摩書房
- Foucault, M.(1976) *La volonté de savoir*. Paris, Gallimard. 渡辺守章訳(1986)『性の歴史I 知への意志』, 新潮社
- Foucault, M.(1986) Of Other Spaces. *Diacritics*, 16 : 22-27.
- Foucault, M.(1993) Space, Power and Knowledge. In During, S.(ed.) *The Cultural Studies Reader*. London, Routledge ,(interview with Paul Rabinow), 161-169.
八東はじめ訳(1984)「空間・知そして権力」現代思想 12-12

- Fraser, N. and Nicholson, L.(1988) Social Criticism without Philosophy: An Encounter between Feminism and Postmodernism. *Theory, Culture and Society*, 5: 373-394.
- Garcia, S.(1993) *Le mouvement féministe: une révolution symbolique? Études des luttes symboliques autour de la condition féminine*. Paris, EHESS(Thèse).
- Gatens, M.(1992) Power, Bodies and Difference. In Barret, M. and Phillips, A.eds., *Destabilizing Theory. Contemporary Feminist Debates*. Cambridge, Polity Press, 120-138.
- Geertz, C.(1986) *Savoir local, savoir global*. Paris, PUF. 梶原景昭ほか訳(1991)『ローカル・ノレッジ』, 岩波書店
- Gregson, N. and Crewe, L.(1997) The Bargain, the Knowledge, and the Spectacle: Making Sense of Consumption in the Space of the Car-boot Sale. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15 (1):87-112.
- Habermas, J. (1985) *Le discours philosophique de la modernité*. Paris, Gallimard. 三島憲一ほか訳(1990)『近代の哲学的ディスクリス』III, 岩波書店
- Hannah, M.(1993) Foucault on Theorizing Specificity. *Environment and Planning D: Society and Space*, 11(3):349-365.
- Haraway, D.(1991) *Simians, Cyborgs and Women: the Reinvention of Nature*. London, Free Association Book. 高橋さきの訳(2000)『猿と女とサイボーグ 自然の再発明』, 青土社
- Harvey, D.(1993) Class Relations, Social Justice and the Politics of Difference. In Keith, M. and Pile, S. eds., *Place and the Politics of Identity*, London, Routledge, 41-67.
- Harvey, D.(1998) The Body as an Accumulation Strategy. *Environment and Planning D: Society and Space*, 16(4):401-423.
- Herpin, N. (1993) Au delà de la consommation de masse? Une discussion critique des sociologues de la postmodernité. *L'Année Sociologique*, 43,295-315.
- hooks, bell(1990) *Yearning: Race, Gender and Cultural Politics*. Toronto, Between the Lines.
- Jackson, P.(1993) Changing Ourselves: A Geography of Position. In R.J. Johnston ed., *The Challenge for Geography. A Changing World, a Changing Discipline*, Oxford, Blackwell, 198-215.
- Johnston, R.J., Gregory, D. and Smith, D.M., eds.,(1994) *The Dictionary of Human Geography*. Oxford, Blackwell.
- Katz, C.(1992) All the Word is Staged: Intellectuals and the Projects of Ethnography. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(5):495-510.
- Keith, M.(1992) Angry Writing:(Re)presenting the Unethical World of the Ethnographer. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(5):551-568.
- Keith, M. and Pile, S., eds.(1993) *Place and the Politics of Identity*. London, Routledge.
- Kunzmann, P. et al.(1993) *Atlas de la philosophie*. Paris, La Pochothèque.
- Lash, S.(1992) *Sociology of Postmodernism*. London, Routledge.清水瑞久ほか訳(1997)『ポスト・モダニティの社会学』, 法政大学出版局
- Latour, B.(1993) *We Have Never Been Modern*. Hemel Hempstead, Haverster Wheatsheaf.
- Lévi-Strauss, C.(1955) *Tristes tropiques*. Paris, Minuit. 川田順造訳(1977)『悲しき熱帯』, 中央公論社
- Lévi-Strauss, C.(1973) *Anthropologie structurale*. Paris, Plon. 荒川幾男ほか訳(1972)『構造人類学』, みすず書房
- Lyotard, J. F.(1979) *La condition postmoderne*. Paris, Minuit. 小林康夫訳(1986)『ポスト・モダンの条件:法・社会・言語ゲーム』, 書肆風の薔薇
- Lyotard, J. F.(1986) *Le postmoderne expliqué aux enfants*. Paris, Galilée. 菅啓次郎訳(1986)『ポストモダン通信:こどもたちへの10の手紙』, 朝日出版社
- Maddrell, A.M.C.(1998) Discourses of Race and Gender and the Comparative Method in Geography School Texts 1830-1918. *Environment and Planning D: Society and Space*,16(1): 81-105.
- Marcus, G.E.(1992) More(critically) Reflexive than Thou: The Current Identity Politics of Representation. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(5):489-493.
- Martin, B.(1992) Sexual Practice and Changing Lesbian Identities. In Barret, M. and Phillips, A. eds., *Destabilizing Theory. Contemporary Feminism Debates*, Cambridge, Polity Press, 93-120.
- Massey, D.(1991) Flexible Sexism. *Environment and Planning D: Society and Space*, 9(2):31-57.
- Massey, D.(1993) Politics and Space/Time. In Keith, M. and Pile, S. eds., *Place and the Politics of Identity*, London, Routledge, 141-162. 篠儀直子(1997)『政治と空間/時間』『10+1』11, INAX 出版
- Mathieu, N.C.(1991) Études féministes et anthropologie. In Bonte, P. et Izard, M. eds., *Dictionnaire de l'ethnologie et de l'anthropologie*, Paris, Presses Universitaires de France, 275-278.
- MacDowell, L.(1988) Coming in from the Dark: Qualitative Feminist Research in Geography. In Eyles, J. and Smith, D.M. eds. , *Research in Human Geography*, Oxford, Blackwell, 155-173.
- Michel, A.(1979) Le féminisme.

- Paris, Presses Universitaires de France.
- Mitchell, K.(1997) Different Diasporas and the Hype of Hybridity. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(5):533-554.
- Murdoch, J.(1997) Inhuman / Nonhuman / Human: Actor-Network Theory and the Prospects for a Nondualistic and Symmetrical Perspective on Nature and Society. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(6):731-756.
- Ollson, G.(1987) The Social Space of Silence. *Environment and Planning D: Society and Space*, 5(3):249-263.
- Ollson, G.(1993) Chiasm of Thought-and-action. *Environment and Planning D: Society and Space*, 11(3):279-295.
- Ollson, G.(1994) Job and the Case of the Herbarium. *Environment and Planning D: Society and Space*, 12:221-225.
- Philo, C.(1992) Foucault's Geography. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(2): 137-163.
- Pile, S.(1997) Space and the Politics of Sleep. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(2) :128-133.
- Pile, S. and Keith, M., eds.(1997) *Geographies of Resistance*. London, Routledge.
- Pile, S. and Thrift, N. eds.(1995) *Mapping the Subject*. London, Routledge.
- Raffestin, C.(1980) *Pour une géographie du pouvoir*. Paris, Litec.
- Reichert, D.(1987) Comedia Geographica. An Absurd One-Act Play. *Environment and Planning D: Society and Space*, 5(3):305-320.
- Reichert, D.(1992) On Boundaries. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10(1):87-99.
- Rose, G.(1995) Making Spaces for the Female Subject of Feminism. In Pile, S. and Thrift, N. eds., *Mapping the Subject*. London, Routledge.
- Rose, G.(1997) Situating Knowledge: Positionality, Reflexivities and Other Tactics. *Progress in Human Geography*, 21(3):305-320.
- Rose, G.(1999) "The full stigma of nationality": contre la nation comme contexte pour comprendre la production de savoirs géographiques. In Chivallon, C., Ragouet, P. et Samers, M.éds. (1999) *Discours scientifiques et contextes culturels:géographies britanniques et Françaises à l'épreuve postmoderne*. Talence, Éditions de la Maison des Sciences de l'Homme d'Aquitaine, 63-73.
- Sayer, A. and Storper, M.(1997) Ethics Unbound: for a Normative Turn in Social Theory. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(1):1-19.
- Shurmer-Smith, P.(1994) Cixous' Spaces. *Ecumene*, 3:349-362.
- Shurmer-Smith, P. and Hannam, K.(1994) *Worlds of Desire. Realms of Power. A Cultural Geography*. London, Edward Arnold.
- Simon, D.(1998) Rethinking (Post)modernism, Postcolonialism and Posttraditionalism: South-north Perspectives. *Environment and Planning D: Society and Space*, 16(2):219-247.
- Skelton, T.(1994) *Sexuality, Race and Jamaican Ragga. Performance and Resistance*. Annual Conference of Association of American Geographers, San Francisco.
- Smart, B.(1994) *Postmodernity*. London, Routledge.
- Smith, N.(1996) Rethinking Sleep. *Environment and Planning D: Society and Space*, 14(4): 505-506.
- Smith, R.G.(1997) The End of Geography and Radical Politics in Baudrillard's Philosophy. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(3):305-321.
- Soja, E.(1989) *Postmodern Geographies:The Reassertion of Space in Critical Social Theory*. London, Verso. 加藤政洋ほか訳(2003)『ポストモダン地理学』, 青土社
- Soja, E. and Hooper, B.(1993) The Spaces that Difference Makes. Some Notes on the Geographical Margins of the New Cultural Politics. In Keith, M. and Pile, S. eds., *Place and the Politics of Identity*, London, Routledge, 183-206.
- Sparke, M.(1994a) Escaping the Herbarium: A Critique of Gunnar Ollson's Chiasm of Thought-and-action. *Environment and Planning D: Society and Space*, 12 : 207-220.
- Sparke, M.(1994b) The Return of the Same in Geography: A reply to Ollson. *Environment and Planning D: Society and Space*, 12 : 226-228.
- Sperber, D.(1981) L'interprétation en anthropologie. *L'Homme*, 21(1): 69-92.
- Sperber, D.(1982) *Le savoir des anthropologues*. Paris, Hermann. 菅野盾樹訳(1984)『人類学とはなにか』, 紀伊國屋書店
- Spivack, G.C.(1994) Can the Subaltern Speak? In Williams, P. and Chrisman, L. eds., *Colonial Discourse and Post-colonial Theory. A Reader*, First editon:1988, London,Harvester Wheatsheaf, 66-112. 上村忠男訳(1998)『サバルタンは語ることができるか』, みすず書房
- Swynguedouw, E. et Kaika, M.(1999) Mondes hybrides: sur la nature, la société, les cyborg. In Chivallon, C., Ragouet, P. et Samers, M.,éds.(1999) *Discours scientifiques et contextes culturels géographies britanniques et Françaises à l'épreuve postmoderne*.

- Talence, Éditions de la Maison des Sciences de l'Homme d'Aquitaine, 271-284.
- Tarrius, A.(1994) Territoires circulatoires et espaces urbains. *Annales de Recherches Urbaines*, numéro spécial Mobilité: 51-61.
- Thrift, N.(1997) The Still Point, Resistance, Expressive Embodiment and Dance. In Pile, S. and Keith, M., eds., *Geographies of Resistance*, London, Routledge, 124-151.
- Touraine, A.(1984) *Le retour de l'acteur*. Paris, Fayard.
- Traimond, B.(1992) Où va l'ethnologie? *Géographie et cultures*, 3:3-25.
- Whatmore, S.(1997) Dissecting the Autonomous self: Hybrid Cartographies for a Relational Ethics. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15(1):37-55.

付録 1

地理学における脱構築の企ての二つの簡単な事例

- 1 ゲンナー・オルソン「沈黙の社会空間」(*Environment and Planning D: Society and Space*, 5, 1987:249)からの抜粋。

私がほとんど話さないことを皆知っている。だが、ある時私は抗いがたい力によって話をせざるを得なくなったと感じて、私の生活の最も単純なさいなことを意味のない言葉に変形した。この生活が生きることのできる唯一の空間である私の声は、生活をその沈黙から立ち現れるようにさせ、他のやり方ではおそらく持つことができなかつた一種の物質的な確実さ、物質的な揺るぎなさを生活に与えたのである。(モーリス・ブランショ『死のセンテンス』73頁)

その挑戦は法外である。社会諸科学の十分に秩序立てられた諸学問にとってではなく、文化の限界を探究するその個々の構成員にとって。マラルメはずっと先んじていた。

何事もその場所以外では起こらなかつただろう。

を除いて

おそらく

星座

あらゆる思想は一か八かの運試しを表明する

危なっかしい偶然

(ゲンナー・オルソン《-/》33頁)

「あなたにとってこれは光栄なことじゃ！」

「私には「コーエー」って、どういう意味かわかりません。」とアリスが言います。

ハンブティ・ダンブティは小馬鹿にしたような笑いを浮かべました。「むろん分かるまいさ、こっちが説明してやらんことにはな。つまり「あなたにとってはこれが議論の決着じゃ」と言いたかつたわけだ。」

「でも「コーエー」は「議論の決着」を意味しませんことよ。」アリスが反論しました。「このわしがある言葉を使う時には」と、見下したような調子でハンブティ・ダンブティは言いました。「それはわしがこうと選んだことだけを意味する。それ以上でも以下でもないのだ。」

「問題は」とアリスは言います。「そんなふういろんなことを言葉に意味させることができるものかどうかよ。」

「問題は」とハンブティ・ダンブティは答えます。「どちらが主人になるか、それにつきとる。」

(ルイス・キャロル：『鏡の国のアリス』268-269頁)

2 ダグマー・ライチェルト「地理学喜劇 不条理な一幕芝居」(*Environment and Planning D: Society and Space*, 5, 1987:335)からの抜粋

作品への招待

「主体と世界の和解を追究すること。だがおそらく我々はすでにそれを越えてしまっているかもしれない。」

(ジャン・ボードリヤール『忌まわしい戦略』)

ひとつの言葉を別の言葉の前に置きながら 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉

言葉を追究すること 我々がすでにそれを越えているとしたらどうなるだろう 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言

地理学喜劇とは、人文地理学の研究において主体と客体の主体性と客体性について叙述する試み、多元主義の帰結と世界観の複数性について叙述する試みである。

言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言

言葉 言葉 言葉 その内容をゆがめることのない記述形式がある 言葉

言葉 言葉 言葉 レベルとメタレベルの和解を探究すること 言葉 言葉

言葉 言葉 言葉 実際に我々はすでにそれを越えているかもしれない 言葉 言葉 言葉 言葉

言葉 言葉 言葉 正直な試みの失敗によって示された 言葉 言葉 言葉 言

言葉 言葉 言葉 不条理劇を書くことの不条理さ 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉

言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言

地理学喜劇とは、形式と内容を結合させる試みである。それがそれ自身を示すことによって語る試み、断片からなる世界について完全なセンテンスを獲得する試み。悲劇を笑うための不条理な喜劇。

言葉 言葉 言葉 本当に不条理な 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言葉 言